

真鍋島の歳時記

真鍋島の一年の物語



『真鍋島の歳時記』発行によせて

瀬戸内海国立公園に指定される我が真鍋島は、奈良時代以前より人が住んでいたと記録されている長い歴史のある島です。

石造宝塔（まるでどうさま）や五輪塔群（えもんさん）など、数多くの遺跡や様々な歴史が残る真鍋島には、まだまだ歳時記に記すのに相応しい伝承行事があると思います。

昔から脈々と受け継がれた行事も年々衰退している中で、今、目で見て耳で聞いた事柄だけでも、わたし達の心の記録に残しておきたいと思っていました。

この度、公民館・制作委員会の皆様により素晴らしい「真鍋島の歳時記」が出来ましたこと、大変嬉しく、心よりお礼申し上げます。

平成31年1月吉日

真鍋島公民館長

山口 晴芳

はじめに

この歳時記は、2018年現在80代までの人達が直接体験し、あるいは見聞きした行事について記したものです。行事はすべて旧暦によっています。

『真鍋島の歳時記』制作委員会

行事

1月

元旦・マナ板叩きと若水汲み

〔岩坪地区〕

大晦日の夕方から夜にかけて、神棚にマナ板と新しい出刃包丁を供えます。除夜の鐘の代わりの太夫さんの太鼓が鳴り始めると、本井戸（ほんいずみ）に行つて木桶に若水を汲み、どんぶり一杯の若水と魚のエイの干物を神棚に供えます。エイは「ええことがあるように」という願いを込めてのことだ、と言われています。

「1・5・3（イチ・ゴウ・サン）」と1回唱えて、包丁の刃を下に向けてマナ板を数回叩きます。1・5・3の意味は不明ですが、真鍋島の注連縄（しめなわ）は、通常の

3・5・7筋と違って、1・5・3筋に藁の茎を垂らしています。

このマナ板叩きが終わると、家内中で八幡宮のお参りをして、元旦には年の神に供えた若水で雑煮を作ります。なお、エイの干物は正月10日までは神棚に供えたままで、その後に煮たり焼いたりして食べます。

〔本浦地区〕

本浦地区にはマナ板叩きの行事はありませんが、元旦に若水を汲み、それで雑煮を作るのは同じです。

元旦・お開帳

〔本浦地区〕

前年に新造船を作った人が、大晦日に讃岐の金毘羅宮へお開帳札（「島内安全」や「無病息災」を祈ってもらった大きな板の神札）を受けに行きます。船が帰ると善九波止でお灯明をあげ、お札は船に供えたまま、その夜は船中泊。

元旦、再び船で天神宮の下まで行き、礼拝して善九波止に帰ります。波止の傍のスベリに船を着けて、無病息災を願って詰めかけた人達の頭をお札で順番に叩きます。本浦の金